

特別寄稿

創立 20 年記念に向けた本学会活動計画 (提案)

A Proposal of Activity Plan of Japan Information-Culturology Society for
20th year Anniversary

会長 片方善治

Chairman Zenji Katagata

まえがき

本稿は情報文化学会の長期計画の一環として提案するものである。創立 20 年記念に向けた学会活動計画としたのは、本学会創立の精神を重んじ、学会活動に参加する誇りを継承していくことによって、発展・充実の駆動力のよすがになると考えたことによる。

来る平成 23 年、本学会は創立 20 年記念を迎える。会員各位の支持によって発展と充実を継続してきた本学会にとって、この年は新たな飛躍台に立つ節目であり、いまから創立 20 年記念に向けた学会活動を計画しておくことの必要を感じる。

図 1 を参考に平成 13 年に実施された創立 10 年記念事業を振り返り、またその後の歩みをたどり、さらに今後の発展にたつて、創立 20 年記念事業に向けた学会活動 (案) を示すことにする。

1. 創立 10 年記念事業の回顧と今後の展望

創立 10 年記念事業計画は、これに先立つ 2 年前に、記念出版事業と記念フェスタ (1) を行うというものであった。2 年という準備期間は短かったが、委嘱された委員各位の懸命な取り組みによって、みごとな成果を収めることができた。ここに改めて感謝の意を表したい。

図 3 の Phase2 に創立 10 年記念行事を示したが、この内容について以下にのべることにする。

1.1 記念出版事業 - 「情報文化学ハンドブック」 - の出版

創立 10 年記念事業として、記念出版物を刊行しようという提案は、役員会において課題になっていたが、具体的な企画や出版元がなかなか定まらなかった。やはり学会誌とは別に編集委員会を立ち上げ、刊行に向けて精力的に取り組むべきであると役員会において決定された。

この決定により、当時東京大学教授 (現、島根県立大学副学長) であった増田祐司理事が委員長となり、5 名の委員、2 名の編集幹事が委嘱された。この決定があって初期の目的を果たすことができたことを考えると、創立 20 年記念出版においても、可及的速やかに編集委員会を立ち上げることが重要であると考えられる。

創立 10 年記念出版は「情報文化学ハンドブック」として森

北出版株式会社から刊行された。刊行日を創立日の 10 月 22 日に予定していたが、実際には後述の「記念フェスタ」の開催日である平成 13 年 10 月 28 日となった。

マクルーハンメディア理論からデジタル経済論の領域までを包含した新しい学問の体系的研究成果を、ハンドブックとして世に問うことができた意義は大きいとの評価を得ることができた。創立 20 年記念出版物は、この評価を引き継ぐものでなくてはなるまい。

1.2 創立 10 年記念フェスタ

「記念フェスタ」の実行委員長の役割は会長が担うべきであるとの役員会の意見に従い、7 名の委員の方々の協力をえて、下記プログラムを策定した。

創立 10 年記念式典 (13:00 ~ 13:25)

第 7 回情報文化学会賞贈呈式 (13:30 ~ 14:50)

記念イベント VIVA! JICS!

ちなみに、例年秋季に行われる全国大会は、この年は夏期に岩手県立大学にて実施したので、学会賞贈呈式は「記念フェスタ」の行事として位置づけられたのである。

第一部の記念式典には、本学会の今後に期待する祝辞が寄せられた。祝辞を寄せられた 6 名の方々のお名前とキーワード、感謝の意を表しつつ下記に紹介させていただく。

- ① 広井 脩 (東京大学社会情報研究所長) 「成長しつつある学問領域のエネルギーが伝わってくる」
- ② 秋山 穰 (日本社会情報学会会長) 「大きな社会的使命と期待を持って注目」
- ③ 山口勝弘 (筑波大学名誉教授、神戸芸術工科大学名誉教授、環境芸術学会会長) 「重要なソフトの価値」
- ④ 飯田 亮 (財団法人・セコム科学技術振興財団創業者) 「期待されるより高い発展」
- ⑤ 藤田史郎 (株式会社 NTT データ相談役) 「21 世紀に果たす重要な役割」
- ⑥ 池田 茂 (株式会社 NTT-ME 代表取締役) 「世の中への大きな貢献」

創立 20 年を迎えたとき、本学会が上記のような評価と期待にこたえているか否かが問われていることを、肝に銘じてお

なければなるまい。

第二部の学会賞については、例年のように学会誌に掲載しているのが割愛する。

第三部は ” VIVA! JICS デジタルメディア万華鏡 “として、下記のようなプログラムを編成した。

- ①中尊寺ゆつこ (マンガ家), 「CG & Talk」
- ②河口洋一郎 (東京大学教授, CG作家)「成長, 進化, 遺伝する情感の芸術」
- ③小林はくどう (成安造形大学教授)「ビデオエッセイ (フランス篇)」
- ④長瀬一男 (わらび座), 「民俗芸能の3次元CG公開」

創立20年記念フェスタにおいては、上記のようなプログラム編成に劣らぬ企画を立てることが望まれる。また、一般の来場者に向けた、内容を工夫し、無料公開のイベントにすることを検討してみるべきであろう。

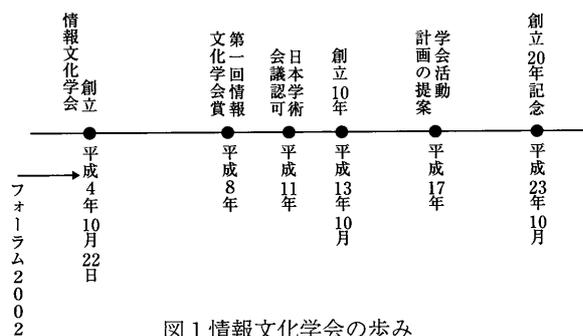
2. 創立20年記念事業に向けた活動計画

2.1 情報文化学への視座の変化

記念事業の取り組みにあたっては、本学会がどのような発展・充実の道を歩んできたのかの認識を基本とするものでなければなるまい (図1参照)。

情報文化学への視座は、学会が発足した当時は、情報と文化の関係を、両者の接点・交差・重畳といった面から研究することにおいていた。したがって本学会の英文表記は Japan Information-Culture Society としていたのであるが、創立10年を機に改めることになった。

それは情報文化学の視座が、情報学と文化学の両者を結合・統合・融合といった面から研究することによって変わったことによる。この背景にあったのは、情報学の急速な発展とともに、文化学という名の知の再編成が行われたことによる。



情報学はインターネットの普及とともに従来の研究課題が大きく変わり、一方、文化学は社会学・言語学・人類学・民族学などを含む人類文化にかかわる知の再編成としての新しい学問体系として整いつつある。

このようなことから、平成13年10月28日に行われた理事会にはかり、創立10年記念フェスタにおいて、新しい英文表記を Japan Information-Culturology Society と変更したのである。なお、略称は従来どおりの JICS である (図2参照)。

情報文化学の視座がこのように変わってから10年を経た学会活動がどのように発展・充実してきたかの成果を問う年として、創立20年記念を考えるのでなければなるまい。

2.2 主たる記念事業の提案と構想

主たる記念事業として、下記の5項目を提案したい。

- (1) 創立20年記念式典
- (2) 同記念フェスタ・イベントの開催
- (3) 同記念出版物の刊行
- (4) 同記念シンポジウムの開催
- (5) 同部会・支部ごとの記念行事展開

以下に上記各項目の構想を示す。

2.2.1 記念式典関連

創立20年記念式典のプログラムは、前述の創立10年の時と同様にすればよいが、当日配布した記念誌(ブックレット26頁)を参考にして、次のような内容を加えるのがよいと考える。

- (1) 情報文化学会20年のあゆみ
- (2) 学会、教育界・産業界などの各氏よりの祝辞
- (3) 記念フェスタ・プログラムの案内と解説
- (4) 記念事業としての出版物・シンポジウム、各支部ごとの行事展開についての紹介

創立20年記念フェスタ実行委員会は、創立10年の時と同様の構成でよいが、記念誌編集委員会については祝辞の依頼などもあり、渉外等に活動的な委員による構成が望まれる。

2.2.2 記念フェスタ・イベント

一般公開を前提としたイベントであるのでCG、ビデオなどを活用したエンターテインメント性を強化したプログラム企画が望まれる。

他の学会とのタイアップ、産業界とのコラボレーションなど、学会内に閉じこもることなく、このイベント開催を機会に、他の諸団体との関係を深めていただきたい。

このイベントの開催には会場費用をはじめかなりの費用を必要とする。したがって早くからこの部門の実行委員会を立ち上げ、まず構想をまとめ、予算案などその内容について役員会に図る必要があるため、早期に学会活動計画の中に位置づけなければならないと考えている。

2.2.3 記念出版物の刊行

創立10年の記念出版物の場合、厳しい経済状況下にあったこともあり、版元がさだまらず刊行を決定するまでかなりの時間を要した。

このことから、創立20年記念出版物については、できるだけ早く版元を選び、本学会と出版社との共同作業として刊行できるようにすることが先決であると確信する。

記念の刊行物としては、情報文化学事典のようなものがふさわしいであろう。事典となればかなり人数の執筆者が必要となる。したがって、いわば学会員が全員参加するような考え方で取り組むことが必要となろう。

編集委員会は全体構想をまとめるとともに、部門別編集を前提とした目次案(第一次案)を作成し、部門別編集委員会を立ち上げる必要があると考える。

	研究・開発の対象	学会の英文表記
昭和57年 ～ * 学会誕生 の母胎	情報と文化を語る会 (CG、ビデオ、 コンピュータ・ミュージック など)。フォーラム2002	Forum 2002
平成4年 情報文化 学会創立	情報学・社会学・ 芸術学の複合領域	J a p a n I n f o m a t i o n - C u l t u r e S o c i e t y
平成13年 創立10年	情報学と文化学 (社会学、言語学、 芸術学、民族学、 など)の統合、 総合・融合	J a p a n I n f o m a t i o n - C u l t u r o l o g y

*座長・片方善治による学際研究グループで情報芸術の活動としては、昭和57年から昭和62年の「視響環境シリーズ」がある。^⑤

図2 情報文化学会の背景と発展および英文表記

2.2.4 記念シンポジウム

本学会では平成16年度より情報文化学ターミノロジーの研究プロジェクトにとり組んでいる。この研究プロジェクトについては、情報文化学研究誌第3号に小特集として発表されている。記念シンポジウムは、この成果報告、あるいは中間報告であることを期待している。

第1回シンポジウムを開催したのは、平成11年1月19日、東京大学山上会館で行った「サイバー社会とECビジネス」である。このシンポジウムは、前述のような研究プロジェクトの成果を発表したのではなく、本学会員の中で、サイバー社会あるいはECビジネスについて研究している個々の研究内容を発表するという形式で行われた。

今後行われる記念シンポジウムとは、その点が異なっている。別の立場からいえば、記念シンポジウムは、あらかじめテーマを決めた研究プロジェクトへの取り組み姿勢をはじめ、組織研究のプロセスなどの報告もなされるであろう。興味深い内容になるものと期待されていると予測しておくべきである。

記念シンポジウム開催に向けた実行委員会は情報文化学ターミノロジーの研究プロジェクト委員会が主体となり、外部の方々に参加することが望ましいように思われる。

なお、参考までに前記の「サイバー社会とECビジネス」の発表者・テーマ等について紹介すれば、以下のようなものである。

片方善治（情報文化学会会長）、「ECビジネスの方向性と意義」
荒川弘熙（株式会社NTTデータ取締役・技術本部長）「ECと情報流通」
増田祐司（東京大学社会情報研究所教授）「サイバー社会とECビジ」
須藤 修（東京大学社会情報研究所助教授）「デジタル経済とICカード」
藤原博彦（東京大学大学院）「デジタル経済と制度会計デザイン」
なお肩書きは当時のものである。

上記の発表者に加えて、次の二人をゲストとして招き、講演をお願いしている。

鈴木茂樹（電子商取引実施推進協議会）「ECに関する現状と展望」
蘆田芳樹（財団法人データベース振興センター・G I S 推進部長）

「サイバー社会-技術の作る社会」

このシンポジウムは一般公開〔無料〕であったが満席となる盛況であった。予稿集として作成した108ページにわたる資料集は、適正な価格で頒布したが、参加者全員が購入した。

このようなこともあって、ゲスト講演者への謝礼などを支払っても、学会からの経済的支援を受けることなく無事終了することができたと、実行委員会からの報告を受けた。

今後のシンポジウム開催に当たって参考になる点が多々あると思われるので、あえて詳しい報告をした次第である。

2.2.5 部会・支部ごとの記念事業の展開

各部会及び各支部は、それぞれ研究集会などの活動を行っているが、記念行事として位置づけた行事を企画し実施することが望まれる。例年と同様な研究集会を開催するとしても、創立20年記念行事であると位置づけ、この位置づけにふさわしい企画を付加するよう心がけてはどうであろうか。要は、この行事を契機に将来に向けて部会・支部のさらなる発展・充実を期す集会になることを期待するものである。

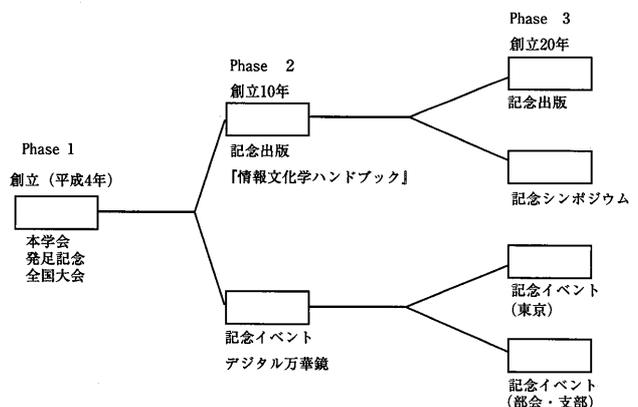


図3 記念行事の展開スキーム（案）

むすび

本学会は、新世紀における情報文化の重要性を予見し、知の再編成としての情報文化学の体系化を目指し続けてきたが、今後はさらに創立20年に向けた学会活動を通じて、学術研究団体としての成果をさらに積み上げて行くことを祈念している。

情報文化学は複合領域の学際的学問体系であるが故に、会員の専攻分野は多種多様であり、それが特徴となっている。創立20年記念の年は、この多様性・多様性を会員各位が相互に認め合いつつ、本学会の特徴を認識するよい機会であると信じる。

図3は記念行事の展開スキームを示したものであるが、これらの行事が、上記の認識を深めることになるに違いない。本稿に述べた計画（提案）について、会員各位が参画されることを切に祈るものである。

参考文献

- (1) 藤原博彦, 加藤光, 榎島栄一郎編, 情報文化学会 vivaljics! 創立10年フェスタ（記念誌）, 情報文化学会, 2001
- (2) 片方善治監修, 情報文化学ハンドブック, 森北出版株式会社, 2001
- (3) (財) 画像情報教育振興協会メディア芸術調査委員会, 先端科学技術研究メディア芸術へと文化的価値を高めるための施策のあり方, 190-191, CG-ART 協会, 2005